

野村伸一編著『東アジアの女神信仰と女性生活』(慶應義塾大学東アジア研究所叢書)、慶應義塾大学出版会、2004年1月刊行。

本書の執筆者は、野村伸一、田仲一成、徐曉望、葉明生、鈴木正崇、上原孝三、奥濱幸子、高梨一美、韓林花、李京燁、高雲基の11名です。

本書は4年間の研究会活動の成果です。この時間が長いのか短いのかはわかりません。ただ、とりまとめ役のわたしの力量では、この期間に、これ以上のものはできなかつたとおもいます。同時に、これ以下のものになる可能性はあったのですが、よき編集者、よき協力者に恵まれました。ただ、残念ながら、わたしたちの研究は「教育」の場に直結する回路を持ちません。これが現時点での小さくない限界を生み出すものであることは重々承知しております。本書が東アジア学の未来に向けてのささやかな踏み台になることを祈るばかりです。

参考までに、以下に、本書の序文から、その冒頭の箇所を掲載しておきます。

本書は慶應義塾大学地域研究センター(現東アジア研究所)の研究プロジェクト「危機の共同体—東シナ海周辺の女神信仰と女性の祭祀活動」(代表者野村伸一)の報告書である。同プロジェクトにおいては、2000年度、2001年度の2年間、十数回の研究例会と二度の国際シンポジウムを開催し、その間に先学および同学の諸氏から数多くの教示を得た。諸般の事情により、その全てを論考のかたちで報告することができず、このような体裁のものとなった。ここで本研究のそもそもの意図は何であったのかを簡潔に記すことで、参加していただいた多くの方々への謝意に代えたいとおもう。

第一に、日本の知的風土にとって東アジアの文化とは何かということへの差し迫った模索があった。中国、台湾、沖縄、韓国本土、済州島に現に住む知友、先学たちとの文化をめぐる対話はいつも楽しいものなのに、この地域の文化の総体を学知の対象としてまともに論じる基盤はないにひとしい。あるのは百年この方の、地域を縦割りにした個別の「歴史」であり「文化」である。そして、そのために、楽しい対話は寸断され、いつでも談話室の片隅に置かれがちである。しかも、そうした一方では、なし崩し的にこの地域の文化の画一化が進行していく。それは、とりわけ基層文化にとって相当に無慈悲な私たちの「近代化」の強要である。

第二に、東アジアの基層文化には基軸となるようなものが設定しうるのかどうかということがある。アジアは一つという岡倉天心の言説が実は「願望」\*1 でしかなかったということは、今日の氾濫するアジア情報を眺めれば、だれしも実感するだろう。だが、多彩にして多様な文化にみえるものの根柢において、真に差異があり、異質なのかどうか、その判断は、少なくとも東アジアの基層文化に関しては当分のあいだ保留してもらいたいと考える。それは何よりも「まだ知られていない」というのが誠実な答えなのであるから。

第三に、東アジアの基層文化における女神とそれをめぐる女性の文化史は、地域共同体

---

\*1 山室信一は大著『思想課題としてのアジア - 基軸・連鎖・投企』、岩波書店、2001年のなかで、岡倉天心の『東洋の理想』(1903年)における、かの名高い理念表明の裏には、「アジアの屈辱」という差し迫った現実認識があったことを指摘しつつ、いかなる意味でひとつであれかしと望んだのかを叙述した(48頁)。しかし、歴史の現実に現れてきた諸々のアジア認識は、天心の、繊細にたゆとう裏面の認識とは相容れない自民族中心主義の変異型であった。この間の近代日本の思想史については、同書、第一部第二章を参照のこと。それとは別に、今日では、アジアは多様ということが逆にあまりにも安易にいわれていて、これは結局、「隣人」に切実な関心を持とうとしないことの隠れ蓑になろうとしているかのようでもある。わたしは山室信一の誠実な基軸設定の試みに対して二つのことを痛感した。一つは、「他人の痛みは三年待てる」ということばがあるが、まさに日本の学知は二〇〇三年になってもまともな批評をなしえていないこと(これは本人の弁。もっとも贅辞だけからなる「書評」なるものはわたしも目にしたが)。今一つは、その驚くほど広範な思想基軸、連鎖のなかに、「女性生活」や芸能者の担った歴史はついにみつけれなかったことである。

の側からみて何であったのか<sup>\*2</sup>を追究することである。わたしたちの近代において、「重要」とみなされたもの、すなわち国家、民族、法制、官僚、学問、出世などということは、そしてそれらをめぐる言説とその担い手は完全に男の手に独占されてきた。そして、今日の急速な画一化のなかで、この地域の社会はより一層こうしたキーワードに縛られていくかのようだ。もちろん、ここでは、女性の社会進出なるものも叫ばれるが、その内実の多くは、上述のキーワードへの果敢な挑戦ということに過ぎない。こうして枠組はむしろ一層、堅固になっていくかのようである。しかし、これらの言説から生来無縁の者たちの、あるいは無理矢理引きはがされた者たちの文化とは何であったのか。女神や女性生活史の領域を探求することだけがそれに答える道ではないが、少なくとも東アジアの基層文化において、これほど広く、大きな領域もまたなかったといえる。にもかかわらず、それに近づく枠組さえないのである。

第四に、東アジアの地域研究の必要性が説かれるとき、忘れてならないのは、その文化の探求においてはさながら糸を紡ぐような根気が必要だということである。本書におさめた論考の端々にみられるように、女神とその周辺に行き交う情意は一見些末な行為に集約されることが多い。民族の生存、国家の存亡、国民の秩序、教育などを第一に論じるべきと信じる知識人にとって、福建省の片田舎で長命縷の糸の端をハサミで切って子供の行く末を案じるだのなんだのといったことは、どう考えても些末なことにしかすぎないだろう。「一体、それが何だというのだ。」そう、精神の高揚や顕示とはかかわりのなさそうな文化 - こうしたものをどこにどう位置づけるのか。しかし、ここではその答えは性急に記さないことにする。とはいえ、少なくとも、こうしたことはいえるだろう。この迷信は棄て

---

\*2 女神についての先行研究では田中雅一編『女神 - 聖と性の人類学』、平凡社、1998年がある。それは副題が示唆するように、人間社会一般、あるいは近代社会という共通の器に住む世界市民の立場からみて女神とは何であるのかということ考察したものといえるだろう。それは、もとより、特定の地域にこだわることを明言していないのであるから、世界中の女神についての知の講説であって一向に差し支えはない。とはいえ、そこでの知見は朝鮮や沖縄、中国の共同体の歴史に向けて何かをかたってくれるのかという点では、切実さに欠ける憾みが残った。いうまでもなく、この地域では、産血のゆえの墮獄からはじまり、時代がくだるとともに月経、産褥死、墮胎などが罪、汚れとして問われ、血の池への墮獄という「物語」が経文のかたちでかたられ演じられていく。一方、こうしたなかで、女神の造神活動も盛んになっていく。そこにはまさに歴史がかたろうとしなかった切実な精神史があったはずである。わたしたちはそうしたことの一片でも取り出そうとした。おのずと立場は異なるであろう。

て、あのパフォーマンスを採るなどといった式の文化行政によくみられるやりかた、そして、それを後押しするような知はニセモノだということ。そこからはせいぜい「観光文化」といったていどのものしか生まれまいだろうと。

第五に、わたしたちは、そのようなものとは全く別の次元に東アジア基層文化探求の思想的根柢を求めたいと考えている。すなわち、一体何事なのかと反問される些少な行為の根柢には命あるものへの慈悲があった。それは「産むこと」「生まれてきたもの」への一途な共感に由来するとみられるが、それが古代から中世にかけての仏教思想と触れあうなかで、さまざまなかたちをとりはじめた。ただ、このことを実証し、主張するにはまだ時が熟していない。朝鮮で古来、巫俗と称されたもの、また中国南部で特に進展した女人、とくに母親救済を中核とした目連戯のような広範な祭祀演劇<sup>\*3</sup> について、わたしたちの宗教文化史はあまり多くのことを教えてくれないのである。一方で、民俗学や人類学は、水陸会をはじめとした各種の齋会の歴史的展開にはあまり関心がなく、また宗教学は身体行為や言語伝承の「意味」は問うても、個々の「文体」、どのように演じるのかについては疎い。こうした知の分断状況下では基層文化の思想について性急に縷説したところで、あまり実りあるものとはならないだろう。それゆえ、今回の報告は「思想」に至る地平を提示したものであるということになる。この点はあらかじめご了解を請いたい。

---

\*3 目連戯については目下、共同研究を継続している。その経過については慶應義塾基層文化研究会のサイト [www.flet.keio.ac.jp/~shnomura](http://www.flet.keio.ac.jp/~shnomura) 所収の「福建目連戯摘要並びに映像一篇」ほかを参照されたい。